

1. 評価報告概要表

【評価実施概要】

事業所番号	2470501640
法人名	ケア・サポート 青い鳥 有限会社
事業所名	グループホーム 青い鳥
所在地 (電話番号)	津市高野尾町3006-202 (電話) 059-230-2381
評価機関名	三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成 19 年 11 月 20 日(火)

【情報提供票より】 (H19年10月31日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 19 年 9 月 1 日		
ユニット数	1 ユニット	利用定員数計	9 人
職員数	9 人	常勤 6人, 非常勤 3人, 常勤換算 7.5人	

(2) 建物概要

建物構造	鉄骨 造り		
	2 階建ての	1 階 ~	2 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	51,000 円	その他の経費(月額)	30,000 円~
敷 金	(有) 200,000 円 無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	有(円)	有りの場合 償却の有無	有 / 無
食材料費	朝食	400 円	昼食 500 円
	夕食	500 円	おやつ 100 円
	または1日当たり 円		

(4) 利用者の概要(10 月 31 日現在)

利用者人数	9 名	男性 1 名	女性 8 名
要介護1		名	要介護2 3 名
要介護3	3 名		要介護4 3 名
要介護5		名	要支援2 名
年齢	平均 83 歳	最低 73 歳	最高 91 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	高野尾クリニック 岩崎病院 豊里歯科
---------	--------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

津市郊外の大きな団地の中にあり中古の住宅を購入、グループホームとして認可が受けられるよう増築し開設した。訪問時、事業所の近くで立ち話をしていただいていた住人の方(3人)に場所を尋ねたところ、よく知られていて親切に教えていただいた。団地の一地域に溶け込んだ「一軒の民家」というのがこの事業所の特徴である。室内は暖色花柄のクロスを張り、清潔で明るい雰囲気のある事業所である。利用者も「人事部長」「カラオケ会長」「記録部長」「料理長」などと肩書きをつけ元気にその役割を果たされていた。ホールは賑やかで、どこにでもある家庭のリビングにいるような感じをする事業所である。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目 ①	<p>前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)</p> <p>前回評価の改善課題は「地域交流」と「運営推進会議」であった。地域交流は、下記の「日常生活での地域との連携」の中のエピソードにあるように積極的に交流している。運営推進会議は今回も改善課題となった。</p> <p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>自己評価の原案は管理者がし、全体会議で評価のポイントを報告する。職員全員が読んでおくように徹底している。自己評価は事業所内に掲示してあり、来訪した家族も読んでいます。</p>
	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>今後事業所の質の向上に活かせるような運営推進会議の開催に取り組みられることを期待する。</p>
重点項目 ②	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>事業所に「意見箱」は設置してあるが投函はない。家族会はパーティー形式になっていて、職員のいないところでの苦情は出されていない。事業所に対しては、利用料金の値上げをしないよう要望を直接聞いている。</p>
重点項目 ③	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>この事業所は団地の中の一住宅で、自治会に参加し近所とお付き合いがある。10月30日事業所周辺の住民の方々より「やかましい」と苦情があった。ホールでのカラオケ、コーラス、音読などの音が外に漏れていて職員も夢中で気が付かなかったようである。近くの方々(7人くらい)事業所に来ていただき謝罪、窓に防音二重サッシにすることを約束し、施工した。その機会にグループホームの趣旨について説明をされている。</p>
重点項目 ④	

2. 評価報告書

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	この事業所の理念は「利用者様の笑い」「家族様の笑い」「スタッフの笑い」「地域社会の笑い」の『四笑』である。これまでは文章化した理念であったが、昨年の制度改正での地域密着型の考えも入れ今年10月理念を作り変えた。これは中国の故事『虎溪三笑』からとったもので、この事業所独自の理念を作り上げている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	朝夕の申し送りやミーティング、月1回の全体会議で折に触れ管理者から提案し話し合っている。今年10月の理念の作り変えには全体会議等で全員の職員が関わっており、理念は共有されていてケアの中で実践すべく取り組んでいる。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	自治会には加入している。地域住民の一員として回覧板も回ってくる。自治会主催の「草取り」、自主防災会議、消防訓練にも参加している。「ちびっ子コンサート」を年2～3回開催し地域と交流している。10月には地域から「やかましい」と苦情があり誠意を持って対応し解決している。	○	事業所が団地の中の一民家であり隣の家とは近接している。今後も積極的な地域との交流は大切である。「お茶会」の実施、地域の人のボランティア受け入れ等継続した実施を期待する。
月に					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価は管理者が作成し、全体会議で評価のポイントを説明する。自己評価、外部評価について家族には「WAMNET」を開いて閲覧するように月刊「青い鳥」で伝えている。昨年の改善課題であった「地域交流」は積極的に取り組んでいる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議はこれまでに2回実施しているが、市側の事情、家族の事情等調整がつかず2ヶ月に1回の会議は開かれていない。今後の課題となっている。	○	「運営推進会議」開催は前回の改善課題であったが、今回も改善課題となった。自己評価で会議開催の取り組みを表明しているが、おおむね2月に1回以上開催を目標に今後の取り組みを期待する。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	現状はまだ交流は少ないが、何かあればすぐ市役所に出向いて相談している。地域の人を対象に「認知症の理解について」のセミナーを開きたいと市に話しを持ちかけている。	○	運営推進会議開催や地域への貢献など、今後市の担当者との連携を積極的に図っていくことが望まれる。
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	料金の請求時やパソコンメール等を利用して利用者の状況変化には100%連絡し、その時に家族の意向も聞いている。月刊「青い鳥」も毎月送付している。金銭出納帳は来訪時家族に確認のサインをもらっている。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族来訪時意見や苦情が出せるよう「しゃべりやすい雰囲気作り」に心がけている。意見箱は設置してあるが投函はない。ケアプラン説明時家族の意見は聞いている。家族会では利用料金の値上げをしないよう要望は聞いているが、運営上の苦情は聞いていない。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	昨年(H18年)より退職者がいないため異動はない。開設2年であるが馴染みの関係が出来つつある。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修、勉強会の年間計画はないが、送られてくる案内文書を見て交代で参加している。受講料、会議費等は事業所が負担、仕事での出張となっている。介護福祉士やケアマネの資格をとるために勉強している職員には事業所として援助している。研修報告は毎月(第一月)の全体会議で行っている。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会には加入している。テーマ別の会議や勉強会に職員は交代で参加し交流している。地域内のグループホームとは利用者が合同でレクリエーションを行ったりして特に交流が深い。	○	同業者との交流を強化することは、事業所や地域全体のサービス水準の向上につながる。今後とも積極的に取り組みを期待する。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	家族からサービス利用希望があれば本人と面談し認知症の程度により対応を考える。軽度の場合通常は併設のデイサービスの利用から始め「宿泊」はデイサービスの延長として保険外自由契約で行っている(専用室あり)。馴染みの関係が出来るよう工夫している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	利用者は長い間(時には一人で)生きてこられた人生がある。生き方は皆違うのに、利用者の方から職員は教えられることが多い。昔の古い歌を唄って教えてくれるので職員はしっかり聴いて教えてもらう側に徹している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	この事業所は開設2年目であるので、長い利用者で2年短い人で1年日常の介護の中で希望や思いを把握する努力をしている。利用者の希望は否定せず、それに適わなくても(伊勢神宮参拝希望に近くの高田本山参拝で)近づける努力で満足してもらっている。		
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	ケアマネジャーである管理者が計画を立案、家族の意見を聞いて計画に取り入れ職員全体で検討し計画を作成する。アセスメントは一人の利用者に全職員がアセスメントシートに記入し、一番数値の多いところがケアの課題として検討している。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	介護計画は3ヶ月に1回見直すことになっている。見直しにはモニタリング、観察記録、家族の意見を取り入れている。特変時は随時見直しになっているが特変は今どこもない。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	病院、医院への送迎の基本は家族であるが希望により事業所で行っている。併設デイサービスの延長及び宿泊希望には自主サービス(保険外)として受け入れている。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の受診通院は本人家族の希望通りに行っている。家族の希望により事業所職員の送迎も行っている。連携医(高野尾クリニック)への月1回の受診、依頼による往診も家族の同意を得て行っている。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	入居時、家族には重度化終末期には「看れるところまで看る」と事前に話し合っている。利用者の急変時にはすぐ家族と連携医に相談している。開所時利用者一人の方が急変し、かかりつけ医の指示で市内の病院へ入院したケースはある。事業所の方針は職員全員共有している。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	利用者への「言葉使い」「声のかけ方」等、誇りを傷つけないよう会議などで見直しを徹底している。利用者の中には傷つく言葉を聞くと怒り出す人もいて職員が教えられている。	○	これからの高齢者介護のキーワードは“尊厳”であるといわれている。認知症の利用者が対象であるが故に、今後も利用者の誇りを尊重する関わりの徹底を期待する。
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的には一日の過ごし方は決めてあるが本人のペースを尊重し一人ひとりに対応している。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備は職員と利用者(料理長を主に)とで行っている。味付けも好みにより工夫している。食材は2/3は外部配食、1/3を近くのスーパーへ利用者と職員で買い物に行く。食事も利用者と職員が同じテーブルで和やかに食べている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	基本は利用者9人を4人と5人の2組に分け隔日交代で個浴しているが、毎日風呂の準備は出来ているので希望があるときや汚染具合によっては毎日入浴している。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	好きなこと得意なことを見つけ自己評価にあるような肩書きのついた役割を作っている。コーラスを先にたって唄う人、毎日の出来事をノートに書くのが趣味の人、料理を率先してやっている人、それぞれ元気に役割を果たされている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	一週間に1回はドライブに出かけている。希望者は買い物に出かける。なるだけ事業所の外に出るようにしている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	昼間は玄関に鍵をかけていない。時々外に出て行く利用者がいるがそのときは必ず職員と一緒に後からついていく。利用者3名に一名の職員が担当して見守っている。入居間もない利用者の中には夜間自室に鍵をかけている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	最低年1回は防災についての勉強会実施。消防署立会いで夜間を想定した防火避難訓練を実施している。夜間の緊急時には事業所の周辺地域に4名の職員が居住しており応援態勢がとれる。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量は毎回チェック表に記入している。栄養状態については栄養士の助言を受け調理に活かしている。水分摂取については過去に脱水症状を起こした利用者がいた経験から一日1500cc～2000ccを目途に補給している。夜間も真水のペットボトルを持って巡回し補給に努めている。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングはオープンキッチンで食事準備の匂い、茶碗を洗う音など生活感が溢れている。食事後はピアノに合わせてコーラスをしたりピアノの弾ける利用者が童謡を演奏して楽しんでいる。建物は新しく(開設2年)共用の場所は全て明るく清潔である。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は暖色の明るいクロス張りでベッドが多いが希望により畳を敷いた部屋もある。テレビの持ち込みは自由。なるだけ使い慣れた物を持ち込み居心地の良い居室になるように配慮している。		